

公益社団法人にっぽんど真ん中祭り文化財団

事務局長 統括プロデューサー 白山智恵氏に 聞く

日本のど真ん中・名古屋の夏の最後を飾る踊りの祭典「第28回にっぽんど真ん中祭り」が8月28、29、30日、中区栄・久屋大通公園を中心に市内各所で開催される。来場者230万人と国内第3位の来客数を誇る、だれでも参加できる市民参加型の祭りはどんな感動を届けてくれるのか。事務局長で統括プロデューサー、白山智恵さんに話を聞いた。



次世代がバトンをつなぐ――

求心力で理念を深め、広げることが一番の役割

― どまつりの始まりは？

白山事務局長・統括プロデューサー どまつりは今年28年目を迎えますが、1999年に名古屋の学生が始めた祭りです。キッカケは札幌のYOSAKOIソーラン祭り。その祭りに参加した学生たちが、刺激を受けて、自分たちも祭りで街を活気づけたい、誰もが主役になれる祭りを作りたい、というところから始まった祭りです。

先週、私も10年ぶりにお邪魔したんですが、やっぱり街が騒ぐというか、揺れる。人々が笑顔になるっていう、どまつりも共通しますが、原点に戻った感じで帰ってきました。

どまつりも大学生を中心に始め、今では一般公益財団法人という形で主催し、職員数人で運営していますが、今もメインステージの運営や企画、台本作り、司会など現役大学生がバトンを受け継いでおり、学生主体の祭り、という感じです。

― 概要を教えてください。

白山事務局長 今年も8月の最終金土日の28、29、30日に名古屋市内16会場で開催。テレビ塔のある久屋大通公園を中心に名古屋駅や大須観音、名古屋城などの名所に会場を設けさせてもらっています。

海外を含め211チーム約2万人が参加します。一番の見どころは久屋大通公園会場のメインステージとテレビ塔下のいつもは水の張ってあるところの水を抜いたパレード会場での観覧（一部有

料）。パレード会場は名古屋にしかないロケーションなのでイチ押しです。

どまつりの最大の特徴は、各チームがご当地自慢を踊りで表現することで、地域文化をリズムカルにアレンジした音楽にのせて、華やかな衣装と、目を見張る演出で魅せます。そして様々な部門ごとの審査を通過した優れたチームが最終日ファイナルコンテストに臨み、どまつり大賞などが決定します。

― 参加者の変化はありますか？

白山事務局長 やはり名古屋の学生グループが多い。大学の公認サークルもあります。でも北海道や九州からの参加や海外からも来ています。年々、名古屋の夏も酷暑となり、体力面を考慮して20チームくらいが抜けて、新たな20チームが新規参加したりの入替わりはあります。大学生が卒業して社会人になってチームを作るケースも。

年齢的には0歳から89歳まで幅広いんです。0歳といってもベビーカー参加で、ファミリーチームですね。そして最近では3世代で踊っているチームも。孫と一緒に趣味というかサポートでもいいんですが、深みを感じます。同じ舞台上で楽しさや感動を分かち合えるって、なんかいいですね。

人数は最大150人目安。実際はステージの広さから見えているのは120人くらいですが、大道具とか、旗など裏方で支えている人もいます。平均